慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロシア科学アカデミー・ピヨートル大帝人類学民族学博物館蔵の二絵巻について
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	三田國文 No.60 (2015. 12) ,p.161- 185
JaLC DOI	10.14991/002.20151200-0161
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20151200-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロシア科学アカデミー・ピヨートル大帝人類学民族学博物館蔵の二絵巻について

辻　英子

はじめに

二〇一五年四月七日にサンクト・ペテルブルク市にあるロシア科学アカデミー・ピヨートル大帝人類学民族学博物館（通称クンストカメラ）所蔵・ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ロマノフ（Nicholai Aleksandorovich Romanov, のちのNicholas II. 1868・5・18–1918・7・17）・コレクション（From the collection of the Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography（Kunstkamera), Russian Academy of Science〈RAS〉の無題二作品と「（仮題）女護島」の三絵巻を調査する機会を得た。初回の訪問は一九九八年で、十八年の歳月を経てこの機会にめぐり会えたのである。案内をしてくださったゲルツェフ氏（Dr. Alexander Gertsef・二〇一二年小綬章受賞）および同館学芸員のシニツィン氏（Dr. Alexander Y. Sinitsyn）、二〇一五年六月九日付で掲載を許されたポゴレルスキー館長（Dr. P. L. Pogorelskiy, Chief curator of MAE RAS）に対し、ここに記して各位のご厚意に心から感謝申しあげる。

これらの絵巻が贈呈された経緯については明らかではないが、『明治天皇紀』明治二十四年（一八九一）五月条に次のように見える。

十八日　露国皇太子ニコラス誕辰に当るを以て、天皇・皇后親電を発して祝意を表し、皇后は黒塗藤蒔絵書棚を贈進せらる、能久親王乗艦を訪ひて親らこれを致す。皇太子親電を以て我が皇室に謝詞を呈す、[1]

能久親王はニコライ二世の逗留先の軍艦（Pamyat Azova）を訪ねたのであり、この「黒塗藤蒔絵書棚」が贈られた他は想像の域に留まるが、本稿に取り挙げた絵巻等も含まれていた蓋然性は否定できない。

本稿では、請求番号「312-58/2-1」については翻刻と略解題を、「312-58/2-2」は、詞書はなく現状では絵だけの状態なので、個々の画面を解読して原作名を探っていくのが　目的である。なお紙幅の都合上影印全図を掲載することは断念せざるを得ない。

Ⅰ　NO 312-58・2-1

翻刻と解題

（翻刻）

茶のむしろのまと居は呉竹の世々をかさね
ときつ風おさまれるみ代のもてあそひくさにて
外にしくこともなく交れるからにうち
ひさす都よりあまさかる鄙に至るまて
高きもいやしきもこのみちをたのしまさらめ
やはかゝりしより花の宿にさかりをちきり
青葉のかけにあつさを忘れ月の夜ころは
こゝろをすまし雪の朝の埋火はいふもさら也
冬枯の梢さひしくこの葉ちりつもりたるころこそ
いま一きはにやあらむおなし道に志ふかきか
二人三人ちきりおきてあるし設けするこそ友に
交りて信あるのをしへにもかなひて賢そおもは
るれはし近き住所によりゐてなにかしは
いかにそおそき主のまたしくや思ひ給ふらむ
なとつふやくほと外のかたにおとつるゝ声して
入きたらむはいかはかりか楽しかるへけれ
昔今のものかたり
するほと
に

〔絵一〕

やかて宿につかへる童のいてきてかしこに
行て待せたまへといへはなにかしの主をや先に
たてむおのれは末にしたかひ侍らむなとかたみに
いひあらそふもおかしそこは板ひさしおろし
障子やり戸なともなくてさはかりの板敷に
しりかけて煙くさくゆらすもたのしく打
詠めたる庭の木立もわさとならぬさまにて
くれ竹のかけしけり鳥の音きこえたるおく
ふかき山辺もかくやと思はるゝにさすかに三の径は
石もてつたひつけてたとるへくもあらすあるしは
いし井の水汲て手あらふところに入草木にも
そゝきなとし玉箒もて塵うちはらひかやの
門めきたるやり戸おしあけて
案内するに

〔絵二〕

時雨さへふりいてたれは小笠かさしてやり
戸おしあけつゝ入におち葉うちしき
たる松の木かけに苔むしたる通ひち
みえてしは垣しめゆひたる憂世の外の
すみかにこそ庵の窓には竹の格子おこそかに
打あるはぬりのこしたる壁のまとに簾お
ろしてくゝり入はかりの口にやり戸引たて
かたへに刀かくへき棚さへありて簷近く
手あらふ水きよらにたゝへたり誰もたれも

刀とりおき口そゝき手あらひなとしそこなる
口より入つゝ床の懸物より
炉のほとり
なと見居
ならふ

〔絵三〕

あるしは襖ひらきのしもていてけふの
まと居をことふくに人々ちきりたかへぬ設けを
よろこひはたおとつ日昨日にもけふのまふけの
かしこさいひこすへきを其事さへ侍らて
なめけ也ぬとわふる前裁のおもむきなとかく
清らに住なし給ふこそゆかしとめていふに
かゝる蓬生の宿に来給こそ埋火のめいほく
なりといふもほこらしけなりやふくへ引きり
たるに炭入て持いてうつみ火かきおこし
すみさしそへて薫物くゆらすに梅かゝの
春をもよほすこゝちせらる酒なとすゝめあさ
からぬなさけくみかはすほとみさかなは何
よけむなとあるしのねもころにもてなすも
まめ〳〵しうそ思はるいまははらふくるゝまてに
なりぬといへは瓶子とり入折敷なとも引て
菓子もていてたりさきのこしかけ給ふへき
とこそに行てしはしやすらひたまへと
いふに釜の湯わきたつおとさへ
たのし

〔絵四〕

さらはとていつるにいつのほとにか雪ふり
いてて梢しろうつもりなよ竹のたはみ
たる玉さゝのおもけなるさきにみし
ところも思はぬはかり又珍らしわたりの
石のみゆきはらひたるもこゝろふかくそ
みゆる鐘のおとのきこえたるはあるし
のこよと告るにこそ

〔絵五〕

ふたゝひ庵にいりたるに簾はかゝけつく
して竹切たるをかけて花さしたり
くれなゐの椿にてそありける窓の雪に
いろをけたれしとこゝろしらひやしつらむ
炉のほとりに水指茶入おきたり主は
衣あらためなとし茶碗もていてこと〳〵
しうひらきゐてさま〳〵調度あつかひ
茶たて出すに客人もつゝしみのみて
薫りさへかくはしう濃くもあらす薄くも
はへらすかゝる味はけに初むかしなめりと
いふに宇治のさとに上林なにかしか摘
たりときこゆ

〔絵六〕

そのことさへはてゝところせくそおもひ給ふ
らむかしこにて薄茶まいらせむとうち
ひらきたるところに伴ふ床に名ある工の

うつしゑかけてそらたきのかをりなつか
しうかたへの棚に唐大和の調度なと
珍らかにかさりなせりけふは終日世の
うきわさもわすれぬととけてかたらふに
入相の鐘うちおとろかすれはきぬ〳〵の
暁ならてゆふ暮のなこり告つゝ人々
たちかへるめれはおのれも筆をとむる
こそかゝるくた〳〵しき言かきするも物くる
をしきわさなれとこの道にこゝろさし
なかくもうつしゑのあはれなるに
　　めつるのみ
さま〳〵のあはれおほかるまとゐさへ
かくはかりやとこゝろうつしゑ
　　恭重

〔絵七〕

解題

一　絵に押された印章

312-58／2-1

江戸後期、写本。書架番号No.312-58/2-1。表紙　縦三一・五糎×横三一・二糎。無題。金紙、三葉葵に万字文の縫いとり。紫の平打ち紐が付いている。見返し　三一・二糎、第一紙（詞と絵、以下同じ）一三七・〇糎、第二紙　一四六・一糎、第三紙　一三七・五糎、　第四紙　一三七・五糎、第五紙一三八・〇糎、第六紙　一三七・八糎、第七紙　一三四・八糎、軸付紙（一三・三糎）、全長　九八二・〇糎。

絵に押された印章は「晴真」（図5）と読める。『古画備考四十三　狩野門人譜』（一九〇九頁。『古画備考』は、江戸時代末期、狩野派の狩野伊川院栄信の次男〈長男は養信〉・朝岡興禎による画人伝）にある神谷（狩野）晴真がこれに当たるのではないかと思われる。

神谷晴真、仕二尾州侯一、
免状　其方儀、為二晴川院門弟一、累年画道修業上達之趣
神妙之至ニ候、依レ之其方一代、狩野氏之称、令二免許一者
也、
弘化乙巳年三月　日、狩野永徳立信判神谷晴真老、
一此度御苗字、拙者一代、願之通御免被レ下候段、難レ有次
第奉レ存候、向後御家之御法式堅可二相守一候、仍面如レ件、
弘化二乙巳年（一八四五）三月、　狩野晴真
名判
殿
殿

晴真は晴川院（養信）の門弟とあるから、木挽町狩野家に属し、画中に木挽町狩野家の第二代「常信」[2]風炉先屏風が描き込まれているのも合点がいく。その左下の署名は「常信筆（朱文方印）（図3）」と読める。正客の老武士が賞翫している掛軸三幅には「雪舟筆」（図4）とみえる。

内容は、お茶事に招かれた武士が、その次第を晴真に描かせ

たものと思われる。画中の老武士がその人（図2・4）、詞書末尾の「恭重」（図1）がその名前かと思われる。書も恭重本人のものであるかもしれない。辞書類に該当する武士の名は見つけられないが、『古画備考』に晴真が「仕尾州侯」とあるので、恭重も尾張藩の武士の可能性がある。また、『大日本書画名家大鑑　伝記下編』に、次のように記す。

狩野晴真、本姓は神谷、江戸の人、神谷養朔の男なり、書を父学び　狩野晴川[3]に学び　狩野氏を称することを免許せらる、文久元年（一八六一）十月二十五日歿す[4]

二　木挽町狩野家

晴真の師事した春川院養信（せいせんいんおさのぶ）は木挽町狩野家の九世、祖の狩野尚信（なおのぶ）は江戸時代前期の画家、慶長十二年（一六〇七）十月六日生。右近将監狩野孝信の次男（『日本系譜綜覧』によると三男）として京都に生まれる。画を狩野興以に学ぶ。寛永七年（一六三〇）、江戸に下って徳川秀忠に謁し、幕府御用絵師となり、竹川町に屋敷を拝領、木挽町狩野家の基礎を開き祖となった。安永十九年聖衆来迎寺客殿障壁画を探幽らと制作、慶安三年（一六五〇）四月七日病没、四十四歳。法名円心院実諦日徳。江戸池上本門寺南之院葬る。一に失踪行方不明とも。兄探幽の影響を受けるが、室町風古様を示す水墨画に傑作が多い[5]。

養信の祖狩野尚信（中橋家）の周辺を見てみよう。父の孝信（一五七一―六一八）は桃山・江戸時代初期の画家、通称与次、また右近。元亀二年（一五七一）に十一月二十五日（異説多し）狩野永徳の次男（三男『日本系譜綜覧』）として京都に生まれる。慶長十三年（一六〇八）兄光信が没し、以後狩野家の実質的中心として活躍、禁裏絵所預になる。同十八年造営の御所の障壁画制作を主宰、その時描いた賢聖障子の一部が現在仁和寺に遺る。光信の画風を継承したものと推定される。元和四年（一六一八）八月三十日没、四十八歳。京都妙覚寺に葬る。次男尚信があとを継ぎ、その兄守信（探幽）、弟安信とともに江戸狩野を形成確立した[6]。

孝信の係累の制作になるものに、松井文庫蔵『小倉山荘色紙和哥』（書、絹本墨書・画、紙本着色）がある。飛鳥井雅章の奥書が付され、当時の幕府大老酒井忠清の所望に応じて制作され、寛文十年（一六七〇）三月中旬に完成したことが記されている。この絵の部分は、二十五図ごとに異なる印が押されており、狩野安信[7]、狩野常信、狩野時信[8]、狩野益信[9]など、当時御所[10]の障壁画制作に携わっていた狩野派の絵師による作品である。

このように狩野永徳（州信）の次男（一に三男）孝信は宮廷絵所預に任ぜられた。江戸幕府の職制の整備によって御用絵師が設けられる事になり、元和七年（一六二一）ごろ孝信は長男守信（探幽）を江戸に移住させ、ついでその弟尚信を、さらに宗家を継いでいた三男安信を江戸に送り、それぞれが御用絵師となり、屋敷を拝領、その与えられた屋敷のある町名によって各家を㈠鍛冶橋狩野、㈡木挽町狩野、㈢中橋狩野、㈣浜町狩野と通称してこの四家を奥絵師とし世襲で、所領・扶持が与えられた。その分家、または門人で幕府の表向きの絵事をつかさどるものを表絵師と称した。江戸に移住した守信三兄弟と京都に

残った真髄狩野家は画風上の違いから、現代では江戸狩野と京狩野とよび区別している。[11]

将軍に直接まみえることのできる奥絵師を勤めた狩野派の活動の一端を辿ってきた。当時絵画修業の最初に学んだのは狩野派といわれ、晴真も春川院養信に師事したのであろう。

三　雪舟等楊[12]と晴川院養信

雪舟は元来禅僧として京洛相国寺に修禅したが、生来画技に長じて如拙、周文の技を学ぶ傍ら、また当時舶載せられた中国の名画にも啓発されるところ多く、更に中国に渡って親しくその大自然に接して、東洋絵画の真髄を究めると共に画嚢もまた豊富ならしめるに至った。（略）従って彼の画法を継ぐものに、雪谷派あり長谷川派あり狩野派があるばかりでなく、他の諸画派も雪舟を学んで画技の基盤を涵養したのであって、まさに雪舟は日本近世絵画の根幹をなすというも過言ではない。[13]

狩野正信が壁画を描いた雲頂院の本寺である相国寺は臨済宗相国寺派の大本山、室町幕府三代将軍足利義満が夢窓疎石を勧請開山として創建した。山号は相国承天禅寺という。如拙・周文の画法を継承した雪舟（諱は等楊）等を排出した室町画壇の中心的存在であった。現存最古の建築は一六〇五年（慶長10）完成の法堂で、天井には狩野光信の筆の蟠竜図を描く。寺宝には、猿猴竹林図（長谷川等伯筆）がある。[14]

模本のうちでもとくに注目されるのは、狩野探幽が日日矚目した古画を縮図に残しておいた、いわゆる探幽縮図の中の雪舟資料である。[15]雪舟の画家としての本領が、山水画にあったことは周知のところである。例えば、渡明中の作例である東京国立博物館の「四季山水図」（重文）、帰国直後の習作と思われる石橋家「四季山水図」、東京国立博物館の著名な「秋冬山水図」（国宝。もと四季山水図、四幅のうちの二幅）、毛利家「四季山水図」（国宝）など、現存する雪舟山水画中の代表作例はいずれも四季山水図である。[16]

本絵巻の詞章には「床に名ある工のうつしゑかけて」（七段）とある。この名工とは、掛物の絵三幅に「雪舟筆」と署名した人・雪舟のことである。左右二幅の様態は、「山水図」に見られる形状に通じ、その落款も印章[17]もよく写していると思われる。その右幅は秋、左幅は冬かと思いをめぐらしてはみても、名匠のどの真蹟に符合するのかは明らかではない。中尊は、雪舟筆「寿星図（福禄寿図）（松浦厚伯爵[18]）の図様に似る。ただし真跡の落款・印章は右上にあり、本絵巻の画中では左下にある。

晴川院養信は著作も多く、没する日までの三六年間にわたる『公用日記』[19]（五二冊は東京国立博物館蔵、四冊は諸家分蔵）は奥絵師の日常や仕事の詳細を伝えるものとして重要である。養信は模写に驚くべき情熱を注いだ。東京国立博物館にあるものだけでも、絵巻一五〇巻、名画五〇〇点以上にも及ぶという。当時まだ若年だった冷泉為恭に「年中行事絵巻」の模写を依頼している。これらについては松原茂「狩野晴川院と絵巻」および「奥絵師狩野晴川院の現実[20]」に詳しい。また養信模写の作例の一つに、大英博物館のウエーブサイトの紹介によると、

狩野晴川院養信が十五歳の時に模写した雪舟筆「四季山水図巻」が保管されているという。[21]

ところで日本のウェーブサイトで紹介している「双幅秋冬山水図のうち右幅　狩野養信筆」がある。これは「二幅のうちの秋」であるが、左幅の冬は写っていない。いまのところこの実物およびこれに関する論考等は未見であるが、山水の描法および右下に晴川院法印筆」と落款のあることから、天保五年（一八三四）に法印に至った（三八歳）以降の作品であろう。本絵巻の画師狩野晴真は床の掛物として師養信の作ではなく、師が尊崇する雪舟の山水画を描いたのであった。

四　本絵巻の背景

一般的に詞書の作者と絵師が同一人物だとは考えにくいので、しかるべき人物（例えば「恭重」）により詞の内容が決定され、それが絵師狩野晴真に示されて絵画化されたと考えられる。詞書に、「茶のむしろのまと居」（一段）、「濃くもあらす薄くもはへらすかゝる味はけに初むかしなめりと」（六段）、即ち「初昔」は上等の煎茶、抹茶の銘であることから、美濃の禅僧蘭叔玄秀（京都妙心寺五十三世）作『酒茶論』[22]が想起される。これについては、福島俊翁の翻刻・現代語訳　付解題があり、その解題で次のように述べている。

なお是等と同じ類型に属するもので作者未知の「酒食論」（前掲群書類従所収）「酒餅論」（略）などの如きものがわが室町中期頃から江戸初期にかけて出ているが、それ等には曾て青木正児博士が「抱樽酒話」（アテネ文庫⑤）の中にも書かれたように大体蘭叔の酒茶論からの影響が認められるのであって、酒茶論そのものは比較的短編の著作であるけれども、是が後世に及ぼした所の相当大であったことを想像することができるのである。[23]

案ずるに『酒茶論』と『酒食論』（『酒飯論』）との間にはなんらかの関連があるかもしれないが、本絵巻と『酒茶論』との関係は、末尾を歌で止める手法には共通性があるものの、直接関係はなかったと考える。

先に引いた「一段」・「六段」に加えて茶湯に縁のありそうな語句・表現を抄出してみよう。

・板敷にしりかけて①煙くさくゆらすもたのしく（略）②いし井の水汲て手あらふところに（二段）
・手あらふ水きよらにたゝへたり（略）口そゝき手あらひなとして（略）床の③懸物より炉のほとりなと見居ならふ（三段）
・④薫物くゆらすに（略）⑤酒なとすゝめ（略）⑥みさかなは何よけむ（略）⑦菓子もていてきたり（略）⑧釜の湯沸きたつおとさへたのし（四段）
・⑨竹切りたるをかけて⑩花さしたり（略）炉のほとり⑪水指⑫茶入おきたり（略）⑬茶碗もていて（略）茶たて出すに（略）濃くもあらす薄くもはへらすかゝる味はけに初むかしなめりといふに（六段）
・薄茶まいらせむと（略）床にある名ある工の⑭写絵掛けて（七段）

右の文の点線（稿者）部分を順次たどっていくと、構成上から

これはまさしく茶会の記であると推定される。

五　掛物の「福禄寿図」と常信の屏風と

本文の語釈および茶会の様子について詳述するいとまはないので、それに代えて『槐記』より茶会の叙述を引いておく。便宜上「四項」に抄出した茶湯関係に対応する語をゴチックで示し、その下欄に同番号を付す。

『槐記』は予楽院近衛家熙の侍医山科道安が、日夕家熙に伺候して書き留めたもの。もと『槐下与聞』また『雲上茶話』ともいわれる。享保九年（一七二四）正月から同二十年正月まで十一年間余の記事を含む。家熙は関白基熙を父に後水尾院皇女常子内親王を母として生まれ、中御門天皇の代には摂政・太政大臣を勤め、書画に長じ、茶・華・香などの諸道にも練達していた。なかでも四季を通じて茶会記が詳しく挿絵を付して書きとどめられているところから茶道会では古くから古典として重視されてきた。[24]

『槐記』享保十一年（一七二六）正月条[25]に次の記述が見られる。

○廿三日、進藤左馬頭へ御成　御供（広瀬外記拙）　午ノ下刻御成。
待合　上ノ円座立掛ケ、上ノ莨盆新信楽ノ火入、青竹ノ灰吹、（下略）
上ノ御衣　御褂（ウチキ）、小サ刀、褂ノ字ヲ書ク由、（下略）
掛物③⑭　探幽ノ福禄寿ノ宝尽シテ荷坦タル図ナリ、一生ノ出来物ノ由、表具ハ織部ノ物数寄ナリ、（下略）
棚ニ**香合④**　少シ長ミアリテ、素焼ノヤウニテ、唐草ノ彫物アリ、（下略）

会席
汁　服紗味噌、根芋、小丸焼豆腐、独活、
指味　鯛、山椒、金柑、鯛ヲ半分ハカキ鯛ニシテ半分ハ其侭、
煮物　生雁、三月大根、柚ノ細切、船場、
香物　奈良漬、茄子、瓜、鉢四角ニテ、角ヨリ角へ手付、織部、
御酒⑤
御肴⑥　片木、浅草苔、木葉鰈、
御菓子⑦　薯蕷饅頭焼キテ、
御中立
花生⑨　備前、一尺二寸許リ、細ク中ニテ平ミアリ、白薬立筋アリ、置花生ニシテ、丸キ薄板、
花⑩　緋木瓜、蕗ノ薹、
茶碗⑬　上ハ楽ノ飴薬、アヤスキ、三嶋ノ形、高台素焼、次ハ堅手フラ、
茶杓　二重タメ、宗和、
茶入⑫　瀬戸、金花山ノ手、
袋　和蘭陀モウル、地白、芥子花ノ様ナル模様アリ、
御立
表床掛物
次ノ掛花生　粗物ノ篭、連翹、椿、
夜食
奈良漬
汁　味噌、ホウボ、三ツ葉、
焼物　鯛ノ色付、
煮物　玉子豆腐、
初夜半還御。

○二十四日　昨日ノ御礼ニ参候[26]（下略）

「**掛物**③」の項に、「探幽の福禄寿」が掛けられていたと記してあり、本絵巻「絵七」の三幅一対の中尊に雪舟筆の幸福・封禄・長寿の三徳をそなえた福禄寿軸が掛けられたことも十分に考えられる。その他「煙くさ①」「いし井の水汲②」「釜⑧」「水指⑪」などについては、同享保十一年霜月四日条に、「御茶　深諦院殿　拙　午過参集」に続いて、配列順に挙げると、「御釜⑧（是ハ大徳寺寸松庵ニ、小堀遠州ヨリ寄付セラレシ釜ニテ（略））」、「煙草盆①（駿河細工ノ手付丸盆（略））」「御水指⑪（仁清、白ク長ミアリ、（略））」「御手水鉢（ヌル湯、片口ニ湯、）」、「床掛物（尚信ノ山水ノ切抜キ、雪舟ガヤウニ細カナル事、終ニ不見）」の項目が注目される。また常信の風炉先屏風にちなんだ記述としては、同十五年条に、次例がある。

正月七日、御茶湯始（拙、二）　御居間ツヽキノ御囲居　御待合、御書院ノ次ノ間、常信ガ彩色ノ屏風一雙ヒキマハシ、内ニ薩摩焼ノ火鉢バカリ、〇（下略）[27]

このように以上は抄出に過ぎないが、絵巻の詞書に見られる茶湯の調度、会席の品書等は『槐記』に呼応する内容であり、それに続く心得様の描写も絵巻の本文に通じるものといえる。なお『君台観左右帖記』（群書類従巻第三百六十一所収）「座敷飾」に次のように記す。

絵三幅。四幅。小絵。横絵ノ掛ヤウ。同押板違棚以下ノ飾ヤウ。凡画図ニ記候。

（画図略）

押板ハ三間二間一間半。各三幅一対。五幅カヽリヤウ同シ物ニテ候。三具足。又同前掛リ候。絵ノ間同シ物タルヘク候。三具足ノ卓。同脇卓三ツノアイモ同シ物タルヘク候。本尊ノ卓ノ大小ニヨリ。脇ノ卓ハ寄リ除キ有ヘク候。脇ノ絵二卓ノアイ候コトマレニ候。口伝候也。[28]（以下略）

飾り次第に、脇絵に四季を描いた絵を掛ける場合、春夏秋冬と東より初めて掛けるべきだ、とある。

おわりに

本稿を草するに際し、絵に押された印章「晴真」の解読および伝記については、松原茂先生にご教示を仰いだ。作品を瞥見したに留まるが、正客の「恭重」は書・華・香などに通じた文化人であっただろう。詞書は四季の移ろいを写しつつ、恐らくは新年茶会始を以て筆をおき、それに呼応する晴真の淡白な淡彩風な挿図の織りなす静謐さは、「喫茶によって坐禅の境地を芸術化するよすが」とも無縁ではなかろう。

末尾を飾る「絵七」（図2）は、茶会の全貌が一望できる。本絵巻は、山科道安の『雲上茶話』の流れに立つ茶湯の記あるいは茶会の記と位置付けられよう。晴真は尾州に仕侯したとあり、恭重も尾張藩の武士の可能性がある。蓬左文庫等に史料があるかもしれないがつきとめてはいない。

注

（1）『明治天皇紀　第七』吉川弘文館　一九七二　八二七・八二八頁。クンストカメラの研究員Dr. Alexander Sinitsynより Dr. M. Uspenskiy（エルミタージュ美術館元教授）の次の論考についてご教示を得た。『明治天皇紀』に注目し、贈進品について述べた内容である。Uspenskiy M.V. “The Oriental Voyage” of Crown Prince N.A. Romanov and his Collection of the Japanese Art in

St. Petersburg"//Uspenskiy M. V. Essays on the Japanese Art History. St. Petersburg, 2004. PP. 136-143.

日本絵巻に関する最新の論考に、次のものがある。A. Sinityn" Some comments to the History of the Acuisition of the Japanese Paintings in the N. A. Romanov Collection in the MAE RAS (Kunstkamera), St. Petersburg. 2015

(2) 常信（つねのぶ　一六三六―一七一三）　江戸時代前期の画家。木挽町狩野家第二代。幼名三位、通称右近。養朴また古川と号す。寛永十三年（一六三六）三月十三日、狩野尚信の長男として京都に生まれる。画を父尚信に学び、慶安三年（一六五〇）その病死により遺跡を相続する。同年剃髪して養朴と改め、また徳川家光に謁し、家綱の前でたびたび席画を行った。寛文～宝永にわたり造営御所の障壁画制作に参加、あるいは担当した。天和二年（一六八二）二十人扶持を受領、同年朝鮮国王へ贈る屏風を制作した。宝永元年（一七〇四）法眼、同六年法印となる。御所の障壁画、琉球中山王へ贈る画を描き、二百石を加増された。正徳三年正月二十七日に病没した。七十八歳。法名常心院道雲日観。江戸池上本門寺南之院に葬られる。常信は探幽以後の狩野派において、最も充実した絵画制作活動を行った画家で、探幽様式の装飾化と繊細化の傾向を示す。古画の手控えである『常信縮図』は『探幽縮図』とともに中国・日本絵画史上における重要な資料の一つであるとされている（『国史大辞典』河野元昭）。

(3) 狩野養信（おさのぶ　一七九六―一八四六）　江戸時代後期の木挽町狩野の画家。春川院・会心斎・玉川などと号す。通称庄三郎。寛政八年（一七九六）狩野栄信（伊川院）の長男として江戸に生まれる。文政二年（一八一九）法眼、同十一年家督相続、天保四年（一八三三）法印となる。画法を父に学び、並び賞された。幕府奥絵師、宝永七年（一七一〇）出仕、以後、没年まで奥絵師として仕える。江戸城障壁画をはじめおおくの作画に従事、狩野派最後の大家となった。弘化三年（一八四六）五月十九日病没。五十一歳。池上本門寺南之院に葬る。法名晴川院養信日叡。（『国史大辞典』『国書人名辞典』）。当該絵巻筆者晴真の師。

(4) 荒木矩編輯　第一書房　一九八四年　第三刷（第一刷　一九七五年）二〇七一頁

(5) 『国史大辞典』河野元昭、『国書人名辞典』、『日本系譜綜覧』。

(6) 『国史大辞典』河野元昭。

(7)・(8)・(9)については、『国書人名辞典』、『日本系譜綜覧』、『国史大辞典』等を参照されたい。

(10) 辻　英子『在外日本重要絵巻集成』笠間書院　二〇一一年　四八―四九頁

(11) 『国史大辞典』（谷信一）

(12) 雪舟の法諱「等楊」と道号「雪舟」については、玉村竹二「楚石梵琦筆『雪舟』二大字について」（中村渓男／金沢弘編『雪舟画業聚成』一九八四年　講談社　二一二～二一六頁

(13) 東京国立博物館監修『雪舟　SESSHU』の「序」による。便利堂　一九七五（初版一九五五）年。

(14) 『岩波仏教辞典』、『角川日本史辞典』。伝周文「江天遠意図」（根津美術館蔵・重要文化財『財団創立75周年記念特別展　根津青山の至宝―初代根津嘉一郎コレクションの軌跡―』図版15　三八頁　二〇一五年九月一九日　根津美術館。

(15) 注(13)に同じ。松下隆章「雪舟論」による。二一〇・二一一頁

(16) 注(15)に同じ。二〇五頁

(17) 中村渓男『雪舟』日本美術絵画全集　第四巻　一九七六年　集英社　一二二・一二三頁

(18) 注(12)に同じ。『雪舟画業聚成』の二八七頁上段「8」図。

(19) 松原茂「『古図抄出』と公用日記」（『水茎』8）。

(20) 松原茂『断面日本絵画史』木耳社　一九八八年。

(21) エステル・レジェリー＝ボエール「模写を研究する価値があるだろうか―「酒飯論絵巻」のケースー」（伊藤信博／クレール＝碧古・ブリッセ／増尾伸一郎編『酒飯論絵巻』影印と研究　文化庁本・フランス国立図書館本とその周辺」に次のようにある。同館のウエーブサイトによる紹介で、奥書によると、本模写は、狩

野栄川古信（一六九六～一七三一）が描いた模写をもとにさらに制作された模写である。二一七頁

(22) 天正四年〈一五七六〉奥書。群書類従・飲食部　巻三百六十八。

(23) 千宗室編集『茶道古典全集　第二巻』　一九六七年（初版　一九六二）　淡交新社　二七〇頁

(24) 『国史大辞典』（柴田実）。

(25) 和装八冊本　故人山科道安著・東坊城徳長校訂『槐記』一九〇〇（明治三十三）年、京都聖華房刊。

(26) 全八冊の中、「享保十一年　弐」四丁オ～五丁ウ

(27) 全八冊の中、「享保十五年 同十六年ノ六」一丁オ

○本稿は、「和装八冊本」によったが、その後茶道史の学問的な研究誌としては、基本的な文献を収録した叢書『茶道古典全集』全十二巻、淡交社刊行。総監修千宗室、一九五六年（昭和三十一）から一九六二年にかけて逐次刊行された。第二巻には『槐記』を柴田実、『君台観左右帖記』を谷信一が担当し、担当している。それに先だって一九三六年（昭和十一）から翌十二年にかけて、創元社から『茶道全集』十五巻が刊行されている。

(28) 「文明八年能阿彌」の奥書がある。そのあとに、「右君台観以百花庵宗固筆本書写以大久保西山蔵本校合畢」とある。

Ⅱ　NO312-58・2-2
『文正草子』（仮題）絵巻

本絵巻は十八図の挿絵のみで題名表示はない。現状では詞書はないが、制作当時はあった可能性は高い。汐汲みの場面や牛車を二台連ねる行列、夫婦で神仏に祈る姿などが、あるいは『文正草子』の絵ではないか、ただし現在の絵の順番は本来のものではないと思われる。

一　絵巻の書誌

書写年時　江戸前期（寛文・延宝頃）の写。
装丁・数量　巻子装一軸。象牙軸。
外題・内題　なし。
全体の寸法　縦三四・一糎。長さ一二四六・八糎。絵全長　一二三二・八糎。
表紙　金茶地に菱形文に三葉葵を縦一列に配た金欄装、濃紫の平打紐がついている。
見返し　金紙。縦三四・一糎、横　一三・五糎。
料紙　鳥の子。
挿絵　絵のみ、十八図。

各紙の寸法

表紙　一四・〇糎（見返し　一三・五糎）、第1紙　九五・一糎（絵一）、第2紙　五〇・六糎（絵二）、第3紙　九五・六糎（絵三）、第4紙　九八・三糎（絵四）、第5紙　五〇・五糎

（絵五）、第6紙　九五・八糎（絵六）、　第7紙　五一・八糎（絵七）、　第8紙　九四・八糎（絵八）、第9紙　五〇・八糎（絵九）、第10紙　九六・八糎（絵十）、第11紙　五一、八糎（絵十一）、第12紙　九五・六糎（絵十二）、　第13紙　五〇・八糎（絵十三）、第14紙　五一・〇糎（絵十四）、第15紙　五一・二糎（絵十五）、第16紙　五〇・八糎（絵十六）、第17紙　五〇・八糎（絵十七）、第18紙　五〇・七糎（絵十八）、軸付紙なし。

二　挿絵の語るもの

原本の姿を推定するために、各場面を『文正草子』の諸本に照合し、その内容を探っていく。対照した諸本は次のとおりで、写本から版本へ調査順の配列による。

イ　海の見える杜美術館蔵『文正草子』三巻　江戸時代前期写。二十図。

ロ　慶應義塾大学図書館蔵『文正さうし』二巻　［室町江戸初］写　横山重旧蔵　110X4442　二冊　『室町時代物語大成　第十二』に翻刻（357）がある。絵の数え方をそれに対応させると、見開図は同一場面でも二図と数え、絵は三十六図、次の「ハ」もこれに準じて数える。「ロ・ハ」以外は巻子装で同場面は一図と数える。

ハ　慶應義塾大学図書館蔵『ふんせう』［室町江戸初］写　横山重旧蔵　110X4453　二十六図。

ニ　中野幸一『奈良絵本絵巻集　6』所収早稲田大学出版会　一九九八年　九曜文庫「ふんしやう」三冊　大型本　十九図。

ホ　「ニ」に同じ。九曜文庫「ふんしやう」二十六図。

ヘ　市古貞次蔵版本（「日本古典文学全集」所収）一九八四年（初版一九七三）全十六図。

ト　慶應義塾大学図書館蔵『ぶんしやうのさうし』二冊。版心題　ふんしやう　近世初刊　丹緑本　横山重旧蔵　110X4432　全十二図。

チ　慶應義塾大学図書館蔵『ぶんしやうのさうし』二巻　外題・版心題　ふんしやう　承応二年刊（一六五三）合一冊　全十二図。

リ　その他[1]

次の場面図の概要は、「イ～チ」の諸本の挿図を対照し、該当図がない場合はその他の書（項目「4」）を参考にした。

(1)　（二位中将一行は、文正のすすめで御堂へ行くと、琵琶や琴が立て並べて置いてあり、中将は琵琶を、兵部佐は琴を弾き、藤右馬助は笙を、式部大夫が笛を吹き興じた。楽の音に魅かれて数百の人が白州に集まり尊い楽の音に触れ随喜の涙にくれる。）姫たちも聴きたいというので再び管弦が催され、中将一行は心をこめて琵琶を弾じ、折しも激しく風が御簾を吹き上げ、その隙に姫君と中将とは目を見合わせた。

(2)　都の屋敷で幸せに暮らす中将と蓮華御前、関白殿のお成りを待つところ。

(3)　鹿島の大宮司はながらく仕えてきた正直者の文太に向かって、試みに主従の縁を断つ旨を言い渡す。

(4) 色好みの衛府の蔵人みちしげは、国司として常陸に赴任した。姫たちの評判を聞き、国司は大宮司を御前に召し、随伴の文正の娘を国司の奥方としてさし向けよとの仰せ。文正は大喜びで家に戻る。

(5) 姫を訪ねて遠い常陸国へ下るに先立ち父・関白殿下と母北の政所を訪ねた中将。委細を知らぬ両親は久々の対面を喜ぶ。

(6) 文正の焼く塩は美味で罹病よけの効能があり、たちまち長者になった文正と女房。二人の姫を授かり富み栄える屋敷内の様子。

(7) 文正は姉の蓮華御前、妹の蓮御前を呼び国司が奥方として差し出せよとの申し出の一部始終を語る。姫たちは聞き入れずうかぬ表情。

(8) 殿下の御子二位の中将は姉蓮華姫を連れて都へ上ることになる。東国の大名一万余騎が供奉し、世話役には大宮司と奥方をはじめ、一同競って参集した。四方の蔵の宝物で調えた華麗な輿入れ道具類。

(9) 兵衛佐ら供人三人は千駄櫃を背負い、物売に扮した中将一行はある山中で、齢七八十の老人「見通しの尉」に出会う。老人は、思う人に冬には出会えると予言して消える。

(10) 長者となった文正に、常陸の国の者どもは仕え従った。潮汲み、塩焼き、薪樵りに勤しむ家の子郎等、屋内からその光景を眺める文正と女房。

(11) 年月を経、文太の焼く塩は験あって長者になり、名を改めて文正つねをかと称した。子どものないのを悲しみ、女房を追い出そうとするが、夫婦は鹿島大明神に参詣し子を授けてほしいと祈り、二房の蓮華を賜る。

(12) 千駄櫃を背負い商人に身をやつした中将一行は文正の館の前で商人と名乗り、屋内に通され珍しい品々を売る。

(13) （姉姫蓮華は天人がこの世に出現したかのような美しさで、関白の北の政所も寵愛されること限りない。）中将が皇居へ参内されると帝の喜びはたとえようもない。すぐに臨時除目を行い、大将に任ぜられる。そして今までのことをお尋ねになったので、一部始終を語られると、帝は、妹蓮姫もすぐに参内するようにと宣旨を下された。帝の仰せを敬聴する関白殿下。

(14) 文正の所では都から下った商人をもてなして、管弦の宴のことを大宮司さだみつは聞いた。管弦を聴こうと若君五人を連れ、輿で訪れると、御堂正面に行方不明の中将殿がいたので、驚嘆し輿から転げ落ち庭に平伏する。姫の婿が中将だと聞かされた文正は身も魂も消沈し驚き怖じ恐れ泣いた。

(15) 憂い田舎住まいのかいもなく都に帰った国司一行は関白殿下の屋敷に参上し、諸国語りが行われた。衛府の蔵人は思わず「常陸の国ほど思いもよらない者の入る国はありますまい」と、「鹿島の大宮司の下男で、文正と申すものは前世の因縁からでしょうか富み栄え、そのうえ鹿島の大明神から利生として授かった優にやさしく耀く二人の姫に大宮司をはじめ国々の大名たちや国司として下った京の貴人も言い寄ったが一向に意に沿う様子もなく、仏道に精進し、両親の言うことさへ聞き入れません」と語った。これを聴いた殿下の御子の二位の中将殿は、二人の姫にあくがれた。

(16) 蔵人の常陸国語りをしみじみと聞いた中将は、そのまま見ぬ恋に悩み臥せた。見舞った兵部佐、藤右馬助、式部大夫の三人は常陸国下りに供奉する旨を申し出、策を練る。喜ぶ中将。

(17) その夜中将は、姫君たちの部屋に忍び入り、姉姫蓮華と偲び逢う。二人は契りを結び、歌を詠みかわす

(18) 帝の中宮となった蓮御前は、皇子を出産する。皇子を抱く女房は、乳母として奉仕する関白殿の姫君。皇子は七歳で皇位についた。大祖父の文正は大納言になり、どなたもどなたも百歳を越えるまで、長生きをし、文正ほどめでたい者はない。

三　挿図配列の比較

原初の挿図配列を推定するにあたり、諸本の一部を掲げる。便宜上図に通し番号を付し、錯簡と見られる場合は現状の番号を付す。同場面と見られるが、構図の離れの大きい場合は、（　）を付す。「リ　その他」はスペンサー本を指す。

| | | |

イ、山水画を描いた中央の襖障子の前に中将、右脇の几帳二基の間に蓮華御前、ロ、手前左右に従者七名・女房三人が控えている。都に上り、屋敷で幸せに暮らす蓮華御前と中将を描いたのであろうか。これに共通する構図を探したところ、今治市河野美術館蔵『塩屋文正物語絵巻』[2]三巻の下巻〔絵八〕に到った。その〔絵八〕および前後の詞書は次のとおりである。

（関白殿下は）大くうしにやかてひたちのくにのこくし／給つてふんせうによくかしつき申せ／との給ひ下されけり又ときはの女房も／このたひの御とものほうひにとてひ／ころのそせうにあんとしてくたりぬ／まことにめてたかりける／事ともなり

〔絵八〕

さるほとに中しやう殿御さんたいある／みかとは御らんして此一二年はゆく／ゑもしらすになりぬときこしめし／中〳〵御なけきおはしめすにかへりま／いりし事よとてすなはちりんしのち／もくをこなはれてちう将より中／納言になり給ふいくほとなくて大／しやうにうつり給ふあるときみかとは大／将に御たつね有けるはなにとしてか／あつまのかたまてくたりぬるそと仰せ／けれは（略）めつらしきことかなとてそのゝち／まちとのにの給ひていもうとの君／をまいらすへきよしおほせ下さるゝ／いそきそのよしこくし大宮司に申（傍線稿者）

前段の内容は、関白夫妻の喜びはこの上なく、この度の褒美として大宮司に常陸の国司を、文正には国司大宮司によく仕えよとの仰せを、供人常盤女房には諸領を賜り、みなみな安堵して常陸の国に下った、と記す。〔絵八〕には、中央の山水襖絵の前に中将、右傍の几張の陰に蓮華御前、左手に関白殿下と北の政所、手前に女房たちを描く。この構図の右半面は、本絵巻の「(2)」の場面に対応するが、「(2)」には、左手に座す関白殿夫妻はない。関白夫妻のお成りを待つ二人を描いたと考えてよいだろうか。

後段河野本（略称する）の詞書の傍線部「りんしのちもくをこなはれて」と「まちとの」の語句は他本にはいまのところ認められず、注目される。かなりの諸本はおそらくは暗黙の了解事項としてこれらを省略しているのであろうが、書写者により明文化されたことにより、中将の中納言より大将への昇格は、「臨時の除目を行われて」任命されたことが明確になっている。このことは次いで「(13)」の場面内容を考える上ではいうまでもなく、本段の登場人物の同定にあたり、他本には見られない「まちとの」（中将の父、まつ殿・関白殿下と推定）の記述は貴重である。

(13) クンストカメラ本「絵十三」の清涼殿の御簾の前に額ずき、帝の妹蓮姫の参内の宣下を敬聴する御冠・丹装束（他本と異なり裾は描かない）の人物はだれであろうか。その右に白束帯姿の中将が座しているので、それ以外の者である。共通する構図にスペンサー・コレクション蔵『ふんしやう』[3]がある。額ずく人は御冠に丹装束（裾を引く）、右傍に青装束の中将がいる。明星大学図書館蔵『文正草紙』[4]では額ずく人物は御冠・黒の束帯姿に笏を取り地文入りの裾を引き、チェスター・ビーティーライブラリー蔵『ふむしやう物かたり』(J. 1186) も同

図であるが、中将は丹装束である。国司大宮司・文正はすでに常陸下りの後の段なので、この人物については殿下か使者か迷うところである。河野本の書写者はそれを「まち殿（関白殿下）」と表し、絵師は関白殿下を描いたと考えられる。

スペンサー本の場合、（第86紙）に続く〔絵十八〕（第87紙）は詞書の内容を絵画化したものとしては、「関白殿下の仰せで大宮司には常陸国の国司を賜う」を受けて描かれた図であるので、主体は関白殿下であり、御簾内の人物を帝と解するには無理がある。よって〔絵十八〕は錯簡とみて、前掲諸本に倣い、「ふんしやう七十にてさいしやうになるこそふしきなれ」（第89紙）の後（現状では〔絵十九〕〈第90紙〉）の位置に本来はあったと考えられる。〔絵十九〕も、先の諸本に倣い、「めてたくそおはしける」の後に置くとすると、本絵巻では、紙継のない「第92紙の16行の途中」に置かれることになる。前者は錯簡であるが、後者は詞書の筆者の指示、あるいは絵師の詞書読解力が不十分だったために齟齬をきたしたのであろうか。最終尾（現、第93紙の後）に置かれる例は一般的ではない。

（18）この出産の場面は、産前あるいは産後の様子を描いているのか、はっきりしない。というのは画面中段の女の抱く御子は、かなりの年齢に達しているように描かれているので、中宮蓮御前の出産に当たり、控える文正と御子を抱く姉蓮華御前と解されなくもない。ただしこの場面に至っては、「わかきみひめきみまふけたまひて」（イ慶大本）、「姉は御子あまたあり」（明星大本）としている。ところで、同場面を描く市立米沢図書館本[5]絵巻に帝の妃となった妹蓮について次のように記している。

（下巻）

月日かさ／なりて御さむやすやすとわうし／いてき給ふいまたわうしまし／さねは御かと御心のうちに人し／れすおほしつるにいまは御うれし／さかきりなくおほしけり御ちつ／けにはくはんはくとのゝきたのま／むところまいり給ふ／まことにめてたき／御事にめてたき／御事とも／なか〳〵申はかりはなかりけり（23ウ）

〔絵六〕

一見してこの絵は明らかに産後の場面を描いている。中段右には、身を起こした中宮蓮、その下の乳母・関白殿の姫君に抱かれた御子の表情は、襁褓に包まれたいま生まれたばかりの皇子に相違ない。この詞と挿絵とを援用すると、クンストカメラ本の絵の解釈は「（18）」に述べたようになる。

おわりに

絵だけの作品の原初復元には、諸本の挿絵との対比だけではなく、絵師の詞書の読解力が大きく関わっていることも見えてきた。ここではとりわけ注目される場面（1）御堂内の二位の中将一行の管弦の様子について述べておきたい。中将はいつもより心を沈めて琵琶を弾く。御簾越しに「姫君は聞きしり給ひて〳〵いかなる風のたよりもがなとおほしめしける」の詞書の絵画化に、大概の諸本で姫君は、中将の妙なる楽の音に聴き入り、その良さを聞きわけられて、どのような風でもよいから風が御簾を吹き上げてくれないかと思っている様を描き、楽の音に聴

き入っている姫たちは琴を奏しない。

ところが本絵巻では、折しも嵐が吹きあげた御簾の隙から見えた蓮華と蓮姫両人は琴を奏でている。類例としてスペンサー・コレクション蔵『ふんしやう』[6]下の第一図および明星大学本がある。両本とも構図は本絵巻の場面と左右が反転しており、登場人物数も少ないが、姫たちは琴を奏でるのに熱中している様子が伝わってくるようである。同様の作例にチェスタービーティー蔵で絵のみの「ふんしやう」[7]がある。

このように絵画化にあたり琴を奏する二姫を描くのは、絵師の作品解釈によるのであろうが極めて例外的と言えよう。詞書に描かれた姫君像からは乖離した感を否めない。同時に「琴を奏する二姫」を共有する絵巻は、挿図の系統論に繋がる問題を示唆している。

柳亭種彦の『用捨箱』によると、『文正草子』は正月の読初に読まれたと言われて久しいが、慶應義塾大学図書館蔵『ふんせう』[9]の末尾に次のように記されている。

ふんせういかなるおこなひにてや／かやうにめてたくさかへたまふとしのはしめの／御さうし又は御もうけんのおりふしは／まつ此さうしを御らんしあるへし／たからには御子なりけりあゝ／めてたや〳〵

鹿島信仰を背景に、塩焼長者の一家が栄華を極めたという物語は、久しく贈呈品としても珍重されたのであろう。

注

(1) 注(2)〜(7)等を指す。

(2) 今治市河野美術館所蔵・指定文化財、『塩谷文正物語絵巻』上中下 三巻 (02 365)。平成二七年九月二〇日付で、同館館長 矢野巧氏ならびに一般財団法人 今治文化振興会理事長 川上昭一氏には特別使用許可書をいただいた。外内題なし 字高 二六・二糎 紙高 三一・六糎。

(3) スペンサー・コレクション蔵『ふんしやう』 請求番号 MS94 三軸 (NYPL. "Permission Office" と交渉の結果、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫収蔵「G667」マイクロフィルムに拠る)。下巻〔絵五〕。

(4) 明星大学図書館蔵『文正草紙』デジタルライブラリーによる。〔石井美樹氏担当〕。

(5) 市立米沢図書館蔵『ふんしやう』 三巻・三冊 和二十四番。江戸時代前期写 袋綴横本 一七・六×二四・九糎 管理番号 AA 201001。デジタルライブラリー〔青木氏担当〕による。

(6) 「注(3)」に同じ。下巻〔絵一〕。

(7) チェスター・ビーティライブラリー蔵『ふんしやう』J1178。

(8) 大島建彦文正草子(『御伽草子集』日本古典文学全集 36 小学館 一九六四年(初版一九七四)四一頁・頭注。

(9) 目録番号 110X4453箱(縦一七・八×横二六・〇糎)入り。横本(縦一七・六×横二五・三糎)。紺表紙に外題「ふんせう」(題簽縦一一・二×横四・二糎)、寛永丹緑本の竪本の系統で袋綴(「二ハ」に同じ。

【付記】 成稿に際し貴重な作品をご提供くださった所蔵機関、ことに今治市河野美術館 学芸員 羽藤公二氏にはご高配を賜り、ならびにご助力を得た石川透先生に深く感謝申しあげる。

以下8頁分の図の出典：
All rights reserved the Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography (Kunstkamera), Russian Academy of Science.

図１　312-5812-1　第７紙

図２　絵七

図３　絵七　部分１

図 4　絵七　部分 2

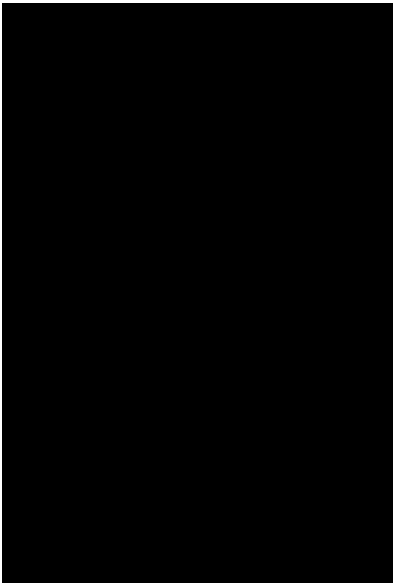

図 5　絵七　末尾印章

[redacted]

312-58/2-2　絵一

[redacted]

絵二

[redacted]

絵三

絵四

絵五

絵六

絵七

絵八

絵九

絵十

絵十一

絵十二

絵十三

絵十四

絵十五

絵十七

絵十八

絵十九